

修養団捧誠会 2001 年意識調査

— 会員の意識の変容 —

永井 美紀子

1. はじめに

修養団捧誠会は、日常生活の中での道徳的実践を重んじる修養道徳型の新宗教教団である。この教団は出居清太郎を教祖とし、東京・池袋本町の本部を中心に、海外の3支部を含め全国に約90の支部を持つ。2001年に発会60周年を迎えた会員数約1万人の小さな組織である。

出居清太郎は若い頃、天理研究会（のちに天理本道、現在はほんみちと称する）に在籍し、1928年の「天理研究会不敬事件」で逮捕されたほどの熱心な活動家であった。だが、出所後は天理本道から離れ、独自の教義を展開して新たな集団を組織している。それら神理研究会、親和会、東光会を経て、現在の会の前身となる財団法人修養団捧誠会を1941年に発会させている。天理教系の教団ではあるが、天理教色はあまり強くない⁽¹⁾。

論者は1987年から3年間にわたり、島菌進教授を代表者とする修養団捧誠会の教団調査研究に参画し、参与観察、インタビュー調査、質問紙調査等に携わった⁽²⁾。今回は2001年より、再び島菌教授とともに本教団調査にとりかかり、参与観察や質問紙調査等を行なっている。本稿では、2001年に実施した質問紙調査の結果分析および、今回の結果と前回の1989年調査結果の比較考察を行ないたい。

はじめに、前回の調査以降の教団組織における主な変化を確認しておこう⁽³⁾。最大の変化は会の代表の交代である。1983年8月に亡くなった教祖の後には、教祖の妻である出居菊のが、会母総裁として教団を継いでいた。1997年11月に彼女が94歳で亡くなり、後継者として教祖夫妻の養子である1929年生まれの出居茂が会の代表となり、同年12月に総裁に就任している。また、会員の代表である会長も、以前は教祖の指名による選出であったが、1996年から評議員による選挙での選出となり、3月には第7代会長に青木恒春が就任し現在3期目である。

そして、部会組織にも編成変えがあった。女性会員には、ミセスの会とおみな会の2種類の部会があったが、ミセスの会がおみな会に吸収合併され、1989年以降おみな会に一本化されることになった。現在は、おみな会の下部組織ということで、「ミセスの集い」と称する年代別の教義勉強会が開催されている。おみな会会長には出居菊のが長年その任にあったが、菊のの死去に伴い、後任には総裁指名により1998年、早山佐和子が就任している。そして、一部の有志の集まりであった東京美法会は、正式に部会として結成され、性別の区別なく65歳以上の会員を対象とする全国美法会が新たに1991年に創設された。

また、会員の高齢化とともに、支部の運営に関しても後継者養成が推奨されるようになった。支部長の任期は4年間を一期とし、おおむね75歳までという規約が設けられるようになった。2001年には、教義に関わる部局である教学院の院長も世代交代し、80歳代の平賀清隆から50歳代の小松秀憲に替わっている。

そして、「ご手印^{しゅいん}お守り」の授与にも新たな基準が設けられた。「ご手印お守り」とは、『お守りのみおしえ』という小冊子に教祖が拇印を押したもので、全部で502個あるという。この「お守り」を作製してから2ヶ月余りで教祖が亡くなったため、とくに教祖の力が残されたものと受け取られることが少なくない。この限定品は、以前は明記された授与の基準がないまま、教祖や会母総裁により熱心な一部の会員に与えられていた⁽⁴⁾。しかしながら、1991年に授与の基準が設けられ、授与者の資格が明確に規定されることになった。つまり、現在は、支部長や壮年部部長などの役職者に貸与するという基準により、個人にではなく、その役職に対して「ご手印お守り」が授与されることとなっている。この「お守り」は、1983年の発会42周年に108人に授与され、その後1990年には201名の会員に個人的に渡されていた。2003年現在では、ちょうど300番までの「お守り」が会から会員に貸与されているという。

以上、前回の調査以降にあった組織の変化や改革を挙げてみたが、これらの変革は会の教勢拡大、発展に伴って起こったというわけではない。あくまでも会員の世代交代および高齢化がかなり進んできたことに拠るところが大きい。ある会員は、「今や信仰の世代の3世が子供を持つ時代になった」と語っているが、会の行事等を見るかぎり、それらの若い世代の参加をみることは多くない。前回の調査時に見かけた熱心な活動をしていた人々が、そのまま歳を重ねて活動しているという印象は否めない。このような状況のもとで、会員は会に対してどのような気持ちで臨んでいるか、また、会員の意識や価値観には前回調査時から変化はあるのかなど、質問紙調査結果を通して考察していきたい。

2. 2001年質問紙調査の概要

今回の質問紙調査は、前回の結果との比較も可能なように、質問項目はできる限り前回と同じものにするという方針をとり、前回のメンバーである芳賀学氏や山田真茂留氏にも意見を求めた。その後、島菌進教授と永井で、1989年調査の質問票を再検討し、その結果、5項目を削り（性道德・ことなかれ正義・会の行事と仕事、家庭の優先順位・仲良くしている人・悩みごとを相談する人）、新たに10項目を盛り込んで、2001年調査票を作成した⁽⁵⁾。新たな項目は、部会への所属と活動度（Q8）・会母総裁のイメージ（Q18）・会母総裁死後の教団のあり方（Q19）・信仰継承のための方策（Q24）・易や占いへの信頼度（Q39）・支持政党（Q45）・10年前の支持政党（Q46）・アレフ観（Q52）・「新しい歴史教科書をつくる会」観（Q53）・善悪の基準（Q62）の10項目である。また、質問の流れにより前回とは順番が違っている項目もある。

そして、調査対象者は、前回同様、教団内のヴォランティア・アソシエーションである清秋会のメンバーとした。前回は東京都・埼玉県・千葉県在住の会員496名のうち面接調査に応じた268名から265名分の有効回答を得たのに対し、今回は未成年者や法人会員等を除いた清秋会会員全員に、面接調査ではなく郵送留置き調査を実施した。2001年9月に質問票を1707通郵送して925名分の有効回答を得ている。前回調査から10年余りたち、前回には2474名であった清秋会会員は、物故者となった者、家庭内の世代交代で会員そのものをやめてしまった者など、諸事情から1756名になっている。さらに、前回回答者268名のうち今回も対象者となったのは177名に過ぎず、そのうち、今回も回答を得られたのは124名であった。

したがって、2001年調査は厳密な意味での1989年調査の追跡調査とはなっていない。しかし

ながら、両調査結果の比較により会員の意識変化の大きな流れを把握することは可能であろう。また、清秋会の会員の減少や全国的に高齢の会員が多いという実際の調査結果により、教団自体の会員の高齢化もかなり進んでいることがうかがわれる。さらに、一都二県のみではなく、全国的な調査となったことで、教団のより全体的な会員の意識や価値観を捉えることができると思われる。

3. 調査結果にみる会員の意識と行動

① 基本属性項目 [F 1 (年齢・性別)・F 2 (職業)・F 3 (学歴)・F 4 (同居家族)]

全体像は前回の調査⁽⁶⁾で得られたものとはほぼ同様である。女性が多く (68.7%)、高齢者や非就業者も多いのだが、学歴は高いという結果となり、典型的な捧誠会会員のイメージである「学歴の高い、高齢の家庭婦人」像がますます強化された。前回調査の時より高齢化はさらに進み 60 歳以上の会員は 46.6%から 71.0%にまで増えている。そのわりに無職と回答した者が前回よりも 10%しか増加していないのは、男性より女性が圧倒的に多いからであろう。

② 入会・入信関連項目 [Q 1 (入会年次)・Q 2 (入会経路)・Q 3 (入信年次)・Q 4 (入信動機)・Q5 (回心体験の有無)・Q 6 (入会後の変化)・Q 7 (捧誠会を必要とする理由)]

入会年に関しては前回結果と少し様相が変わった。前は対象者数が少ないこともあり、昭和 30 年代を頂点としたなだらかな山型であった。が、今回は、なだらかな山型から高い山型に変化している。頂点はやはり昭和 30 年代 (279 人) で、その後 (昭和 20 年代と昭和 40 年代) には頂点の約半数となり、そのまた外側はかなり人数が減るといった形となっている。前回、0.4%に過ぎなかった昭和 60 年以降の入会者は、今回は 4.9%に増加した。しかしながら、これは新たに捧誠会に入会した人が清秋会にも入会したということではなく、若い清秋会会員の結婚によりその配偶者が新たに入会したことによるものと考えられる。

Q 3 の入信動機は前回と同じく、教祖の魅力 (29.8%) と教えの素晴らしさ (28.7%) と回答した者が多い。だが、前は圧倒的に教祖の魅力 (38.8%) が多く挙げられていたのに対し、今回は、教えの素晴らしさを挙げた者とさほどの違いがない。これは、調査対象者が全国的に広がったことに因るのではないと思われる。教祖の存在が会員にとって大きな意味をもつことは変わらないものの、前は首都圏在住の者だったので本部にも近く、教祖との直接的な接触が多かった会員が多数いたに違いない。それで、ことさらに教祖の存在が大きく感じられたのではないだろうか。もちろん、教祖の死後数年を経ての調査と、死後十数年経ての調査という時期的な問題も考慮すべきである。自らすすんで信仰するようになったいきさつを思い出す際に、日々接している数々の教えが、亡くなった教祖よりも前面にでてくるようになったとも考えられるからだ。

次に、会を必要とする理由をみてみよう。前回と同様、肉体的・物質的利益と精神的利益を挙げている者が圧倒的に多い。なかでも精神的利益を挙げた者は 8.6%増え、51.9%となった。しかし、会の理念でもある「理想社会の建設」と回答した者は、10%減少し、3.8%となってしまった。前回も多くの方が選択した回答ではなかったものの、やや少なくなりすぎたきらいがある。NHK の意識調査⁽⁷⁾と同じである生活目標を問う項目では、前回と同様、「みんなと力を合わせて、世の中をよくする」と回答した者は 20%存在すること (NHK 調査では 6.5%) を鑑み

れば、とりたてて会員の意識に社会志向が失せたわけではなさそうだ。会員が理念を忘れたというわけではなく、社会の行く末よりも、自分自身に関心が向くようになったと考えればいいのだろうか。回答者の高齢化がさらに進んだことも原因のひとつであろう。また、捧誠会にふれて人生観が変わるような大きな体験をしたかどうかを問うと、前回よりも数%増加し 66.1%の者が「体験がある」と答えている。

③ 会活動への参与度 [Q 7 (活動度)・Q 8 (部会への所属と活動度)]

会での信仰活動は日頃の修養実践に重きが置かれている。一方、会の行事の際などには、遠隔地でも厭わず足を運ぶ実践、「交流」を教祖が強調していたということもあり、会員は前回とあまり変わることなく活動を続けているようである。本部をはじめ他の支部へもよくでかけている。会員の集まりである浄会などへも半数以上の者が毎月出席している。しかしながら、全体的に数値が若干下がり、活動がやや鈍くなっているという印象は否めない。会員の高齢化により外出が以前より身体的・物理的に、また経済的にも難しくなってきたということもあるのだろう。だが反対に、60歳以上の会員が7割を占めていることを思えば、むしろ行事などによく参加しているほうだと考えられなくもない。教団内の部活動に関しては、約7割の者がなにかしらの部に所属している。そして、それらの部会活動状況についても全体の7割の者が、一般的にみて、それらは活発に活動していると感じている。

④ 一般的な宗教意識と行動 [Q 9 (家の宗教・宗旨)・Q10 (捧誠会以前の信仰)・Q11 (他の宗教の信仰)・Q12 (一般的な宗教行動)・Q13 (他宗教について)・Q38 (霊魂などの実在)・Q39 (易や占いへの信頼度)・Q40 (靈感や超能力の保持者について)・Q41 (前世について)]

会員の一般的な宗教的意識と行動の特徴を Q12 でみてみよう (表1)。この質問は NHK 放送文化研究所による「日本人の意識構造」調査の中の質問とまったく同じものであるが、その調査結果と比較すると明らかに大きな差異がみられる。おみくじ・占い以外の項目では、どの数値も捧誠会の方が大きく上まわっている。とくに前回同様、自己修養的宗教行動 (礼拝や布教をする

表1 宗教的行動の比較

	捧誠会 2001	(1989)	NHK 調査 (1998)	
① 礼拝・布教	64.1	(76.5)	11.4	
② お祈り・お勤め	67.1	(92.2)	12.7	
③ 墓参り	86.8	(95.9)	67.5	
④ 聖書・経典	54.6	(65.3)	6.8	
⑤ 祈願	41.6	(40.7)	29.1	
⑥ お守り・おふだ	58.5	(64.2)	30.6	
⑦ おみくじ・占い	19.7	(17.2)	22.7	(%)

／お祈りやお勤めをする／聖書や経典を読む) ではその差が顕著である。しかしながら、会の結果はいずれの項目においても前回調査よりも数値が下がり、行動の活発さが失われていることは看過できない。前述の会活動への参与度の低下と同様、前回より会員の宗教活動が鈍化している

ことを物語っている。

他宗教について問うと (Q13), 前回では「真理はひとつだから, 他の宗教を信じていようと捧誠会であろうと結局は同じことである」との回答が最も多く (45.1%), 会員の持つ宗教的寛容性がうかがわれた。それに対して, 今回はこの回答を選んだ者が前回よりも 7% 減り 38.3% となり, 「他の宗教も間違いではないが, 捧誠会の教えの方が優れている」と回答した者が 7% 増加して 40.9% となり, 若干, 前者の回答よりも多くなっているのが特徴的である。

靈魂や超能力, 死後の世界などの実在を問う (Q38) 設問では, 相変わらず 8 割もの者が靈魂の実在を信じていることがわかる。超能力に関しても, 実在を信じる者は前回より 8% 減少しているものの, ほぼ半数の者 (49.9%) が信じている。超能力は, 「あるかどうかわからない」と答えた者が 3 割を越え, 無回答の者も 1 割近く存在する。しかしながら, Q40 で靈感や超能力は, 「誰も持っていない」と答えた者がわずかに 2% に過ぎないことを鑑みれば (無回答 3%), 多くの会員が不思議な能力に対して肯定的なことがうかがわれる。前世に関しては (Q41), あると思う者が依然として 8 割を越えている。靈魂, 前世は教祖の説いた教えの内容に, そして超能力は教祖の持っていた不思議な力に関連することから, 非常に多くの会員が実在を意識していると思われる。

⑤ 教団・教祖や会母総裁・教義についての意識 [Q14 (会のイメージ: 修養/呪術)・Q15 (会のイメージ: 聖/俗)・Q16 (教団への満足度)・Q17 (教団統合のイメージ)・Q18 (会母総裁のイメージ)・Q19 (会母総裁死後の教団のあり方)・Q20 (教祖のイメージ)・Q21 (教祖死後の教団のあり方)・Q22 (教団発展のための方策)・Q23 (信仰継承のための方策)・Q24 (実際の信仰継承のための方策)・Q25 (天地の法則を知る経路)・Q26 (ポジティブ思考)・Q27 (病気についてのイメージ)・Q28 (病気の際にとる方法)・Q29 (癒される理由)・Q30 (教祖による癒しの体験)・Q31 (他の会員による癒しの体験)・Q32 (癒しの方策)・Q33 (ご手印お守りについて)・Q34 (「我」について)・Q35 (言霊について)・Q36 (終末観)]

捧誠会に対して, 会員はどのようなイメージを持っているのだろうか。Q14 の結果をもとに, 何よりも教祖の持っていた不思議な力 (ご霊光) の存在に重きを置くか, それとも人格向上や修養に重きを置くかどうかで, 呪術派と修養派との大別を試みた。前回調査では, 呪術的なイメージを有する者 (呪術派) は 38.8%, 修養的なイメージを有する者 (修養派) は 53.4% と, 修養派が若干多いものの, どちらもほぼ同程度存在していた。だが, 今回の結果では, 修養派は 65.4%, 呪術派は 31.8% となり, 圧倒的に修養的なイメージを有する者の方が多くなっている。これは, 教祖の死から 20 年近く経ち, ご霊光の威力を目の当たりにする機会がなくなったことや, 教祖のご霊光の力を頼るよりも, 教えを頼りにするようにと, 教祖の生前から教団を挙げて熱心に説いていたことにもよるだろう。とくに「高学歴の家庭婦人」たちにとっては, ご霊光のような不思議な力, すなわち呪術的な力の存在を説いて信仰を語るよりも, 心の持ち方, 使い方をはじめとする修養を説く教えの方が非科学的でなく, すんなり納得のいくものであるのかもしれない。だが, この大別は性別との有意水準での相関関係はないようである。つまりこの大別は男女差に関係なく, 会においてみられるということになる。先に, 他宗教について問う Q13 の回答で, 前回と比べ, 他宗教よりも捧誠会の優越性を認める者が増えていることを指摘した。そこで, この修養/呪術の大別と, Q13 の回答を掛け合わせてみると, 興味深い結果となった (表 2)。

表2 会のイメージと他の宗教に対する考え方との関係

	修養派 2001	(1989)	呪術派 2001	(1989)
1. 真理は一つだから、他の宗教を信じていよ うと捧誠会であろうと結局は同じである	43.8	(54.3)	28.4	(40.6)
2. 他の宗教も間違いではないが、捧誠会の教 えのほうに優れている	39.9	(27.5)	48.8	(47.9)
3. 捧誠会は宗教ではないので、他の宗教とは 比べられない	<u>16.3</u>	(<u>18.1</u>)	<u>22.8</u>	(<u>11.5</u>)
	100.0	(100.0)	100.0	(100.0)(%)

今回の結果では「真理はひとつだから他の宗教でも捧誠会でも同じである」と回答した者は圧倒的に修養派に多く、それに対して「捧誠会の方が他の宗教よりも優れている」と回答した者は呪術派に多い。そして、「捧誠会は宗教ではないので、他の宗教と較べられない」と考えている者も若干、呪術派が多くなっている。これを前回の結果と比較すると注目すべき点が2点浮かび上がる。ひとつは、捧誠会の優越性を認識する者のなかで、大別した二派の差が小さくなったという点である。前回は約20%の差をつけて呪術派に会の優越性を意識している者が多くみられた。だが、今回は修養派で会の優越性を意識する者が増え、その差は約10%と半減している。もうひとつは、捧誠会を「宗教ではない」と意識している者のなかでの二派の割合が前回の調査結果と逆転している点である。前回は、修養派に「捧誠会は宗教ではない」と意識する者が多く、他宗教に対する寛容性とあいまって捧誠会にあまりこだわらない傾向が見受けられた。しかしながら、今回の調査では、呪術派の方に捧誠会を宗教として意識していない者が多く存在するという結果となっている。この2点からは次のことが指摘できよう。すなわち、呪術派には宗教としてであろうが、そうでなかろうが、捧誠会の優越性を意識する者が多いということ。そして、修養派には捧誠会であろうが他宗教であろうが同じであるとしてあまり捧誠会にこだわらない者と、宗教として捧誠会の優越性を意識している者の二派にさらに大別されるということである。

次に信仰活動を行なう際の感覚に対するイメージを聞いた Q15 では、聖的なイメージを抱く者、50.8%、俗的なイメージを抱く者、47.5%となり、前回の結果(44.7%と55.3%)とあまり変わらない。この回答も修養/呪術の大別と相関しており、聖的なイメージを抱く者には呪術派が多く、俗的なイメージを抱く者には修養派が多くなっている(表3)。

表3 ふたつの会のイメージの関係

	修養派	呪術派	
聖的なイメージ	49.7	56.9	
俗的なイメージ	<u>50.3</u>	<u>43.1</u>	
	100.0	100.0	(%)

また、教団への満足度(Q16)も、前回同様7割の者が満足していると回答している。そして、この回答も修養/呪術の大別と相関しており、呪術派の方が修養派よりもやや高い満足度を示している(表4)。

表 4 会のイメージと教団への満足度との関係

	修養派	呪術派	
満足	70.1	78.7	
不満足	20.3	14.4	
考えたことがない	<u>9.6</u>	<u>6.9</u>	
	100.0	100.0	(%)

教義解釈の統一性と教団組織の統合性とを掛け合わせて尋ねた Q17 では、前回と同様「教えについては皆が様々に解釈しているが、会としてよくまとまっている」と回答した者が 49.1% と一番多く、一元的な教義的価値の共有によらずに教団の統合性が保たれているという捧誠会の特徴は保持されていることが確認された。

教団発展に関してとるべき方策を問うた Q22 では、前回と言葉使いを少々変え、4つの選択肢の差異を明確にしてみた。一番多かった回答は前回と同様に、「会員一人一人が一層、しっかりとした信仰を持てばそれだけでよい」というもので、依然として会員を増やすことに頓着せず、個人の内面的修養に重きを置いている様子がうかがわれるが、数値的には前回よりも 15% 減少し 38.6% となっている。それに対して、「外部の人にも積極的に声を掛けて、会員を増やしていけばよい」と答えた者は 7% 増えて 23.2% に、「会員は増えなくても、若い会員や不熱心な会員に呼びかけて、積極的に参加してもらうようにすればよい」と答えた者も 6% 増えて 27.2% になり、それぞれ自分以外のものに働きかけるという選択肢が前回よりも増加しているところが特徴的である。

それでは、家庭内での信仰の継承についてはどのように考えられているのだろうか。Q23、Q24 の結果をみてみよう。信仰継承のための方策で一番大事だと考えられており、しかも実際に実践した者が一番多かったのは、消極的な方法である「みおしえを実践する自分の姿を子供にみってもらうこと」であり、全体の 6 割弱の会員が選択している。信仰継承の取り組みに積極的な「会の諸行事に参加させること」は二番目に大事だと考えられているが、15.7% の支持に過ぎず、実際の子育ての際にも 26.6% の会員にしか実践されていない。さらに、この回答は前回と較べて 11% 減少しており、もう一つの積極的方法である「習慣として教えを身に付けさせた」という会員も約 7% 減って 22.7% になっている。今回、会の行事に参与観察を行なった限り、あるいは状況を会員からうかがう限りにおいて、現在の諸行事に参加している会員のなかに若い会員をみかけることはほとんどない。その意味で、会員らが選択してきた子供に対する消極的な信仰の継承方法がうまく機能しているわけではないことが推察される。会員の高齢化の現状を目の当たりにし、多くの会員が個人的な内面の修養にだけこだわるのではなく、外部への呼びかけや、内部の会員の呼び起こしに関心を示したかのように思われる。だがそれは、家庭における信仰継承実践の不成功により現況の一端を招いた世代会員の自己反省を伴う意識の表われなのかもしれない。

Q18 と Q20 では会母総裁と教祖に関するイメージを問うている。ともに、1: 道徳者、2: 霊能者、3: 親、4: 神の 4 つのイメージを用意した。教祖に関しては、前回と同じであり、多い方から順に 2 (48.1%)、4 (26.4%)、1 (19.4%)、3 (3.1%) という結果となった。なかでも霊能者のイメージを挙げた者は全体の半数近くであり、前回よりも 7% 増加している。それに

対して、会母総裁に関しては、1: 道德者 (40.9%), 3: 親 (30.9%) のイメージが強く、2と4のイメージを抱く者はそれぞれ約2%に過ぎない。特に考えたことがないとする者も21.7%あり(教祖の場合は2.6%)、教祖に対する会員の意識との差が顕著である。また、教祖に対するイメージは修養/呪術の大別との相関がみられた(表5)。神と答えた者ではどちらも3割弱と相違はないが、道德者と霊能者と答えた者ではそれぞれ特徴的な差が生じている。どちらの派にも教祖を霊能者ととらえている者が多い。特に呪術派では6割近くの者がそうイメージしており、半数に満たない修養派との違いが出ている。そして、道德者と答えた者では、修養派は25%弱、呪術派は10%強で、修養派の割合が呪術派の割合の倍以上となっており、修養派の方が呪術派より教祖を道德者と強くイメージしていることがわかる。

表5 会のイメージと教祖のイメージとの関係

	修養派	呪術派	
1. 道德者	24.2	11.0	
2. 霊能者	45.3	58.8	
3. 親	2.7	4.1	
4. 神	<u>27.8</u>	<u>26.1</u>	
	100.0	100.0	(%)

教義に関してみていこう。まず、癒しについてみてみよう。前回と同様に、医学的な病氣観と宗教的な病氣観とが同程度持たれているものの(Q27)、実際にはきわめて医学的な対処が重視されているという(Q28)特徴は変わらない。そして、今回の結果で特に顕著なのは、会において癒される理由(Q29)のうち、複数回答において、教祖のご霊光の素晴らしさを挙げる者が15%も減少したことである。先述のように、入信動機でも教祖の魅力を挙げる者が約10%減少しており、これらの結果から、教祖の持つ影響力が前回調査時よりひとまわり小さくなっていることがうかがわれる。会において会員が癒される理由のうち、複数回答でも単数回答でも10%以上回答者が増加したのは、「病気を宗教的に受け止めて教えの実践に励む」ということではなく、あくまでも、「医者にかかり薬を飲むという本人の努力により病が癒される」という回答であった。この合理的な選択の増加は、会における修養派の増加とも関係しているだろうと思われる。修養/

表6 会のイメージと病気が治る理由との関係

	修養派 2001	(1989)	呪術派 2001	(1989)	
1. 教祖のご霊光はすばらしいものだから	10.5	(11.3)	23.7	(27.3)	
2. 病気の本人が治そうと医者にかかったり薬を飲んだりしたから	39.9	(27.8)	27.2	(21.2)	
3. 会の教えに従い、病気をみせし反省実行に励んだから	47.1	(54.1)	45.2	(49.5)	
4. もともと治るものだったから	<u>2.5</u>	<u>(6.8)</u>	<u>3.9</u>	<u>(2.0)</u>	
	100.0	(100.0)	100.0	(100.0)	(%)

呪術の大別と単数回答を掛け合わせると（表6）、「教えの実践に励む」を挙げた者はどちらの派も同程度であるが、「ご霊光の素晴らしさ」を挙げた者は呪術派が修養派の倍以上で、「医学に頼った本人の努力」を挙げた者では修養派の方が呪術派よりも10%以上多くなっている。そして、前回の結果と比べると、呪術派では前回とほぼ同様であるが、修養派では上位のふたつの差がさほど小さくなってきたことが特徴的である。

さて、前回の調査以降、授与基準が新たに設けられ、会員個人にはなく役職に対して授与されることとなった「ご手印お守り」だが、会員の意識にもその変化の影響は出ているだろうか。まず、会でとられる癒しの方策を尋ねた Q32 では、「ご手印お守り」による癒しの認識度の低下がみられる。「お守り」による癒しは、もともと会員間でそれほど広く認識されたものではなかったが、今回の結果でも 30.8% となり、前回よりもさらに約 13% 低下している。Q33 の「ご手印お守り」自体の認識度を測る問いでも、「お守り」を「知っている」と答えた者は 7% 減少した。さらに、「知っている」と答えた者に対して、「お守り」の必要性を尋ねると、「絶対必要」と答えた者が 5% 減り 14.9% に、反対に「あまり必要ではない」と答えた者が 7% 増加し 30.3% となっている。また、以前は授与者たちの集まりで、この「お守り」は「教祖の押印が押されている尊いものだから持っていること自体重要なのだ」と語られ、所持している意義を尋ねても「持つこと自体」と答える者が 3 割ほど存在していた。だが、今回では「持つこと自体」と答えた者は 2 割弱に減少したものの、「修養実践のお守りとして」の所持と答えた者は 22% も増えて 84.1% にも上っている。また、授与者の集まりでも、以前は、「お守り」による癒しの体験が話題にされることがあったが、近年は、以前のそうした「お守りに教祖の不思議な力が残されている」という考え方自体も語られなくなった。それどころか、「そのような考え方はかえってご手印お守りの主旨をせばめる」として注意がうながされ、「ご手印お守りはお手当て（癒し）のためのものではない」とも話し合われている。さらに、授与が役職に対してなされることで、「役職についてくるもの」という漫然とした意識も生じてきているようだ。「ご手印お守り」は「教祖の不思議な力が残されたもの」としての重みもかなり減り、もはや名実ともに「お守り」と化してしまった。この「お守り」に対する思いも、修養派/呪術派の大別と相関し、「ご手印お守り」は「絶対に必要」と回答した者は当然ながら呪術派に多く、修養派の倍の割合となっている（表7）。

表7 会のイメージとご手印お守りに対する意識との関係

	修養派	呪術派	
1. 絶対に必要	12.1	24.0	
2. どちらかといえば必要	52.0	43.6	
3. あまり必要でない	33.3	30.4	
4. まったく必要でない	<u>2.6</u>	<u>2.0</u>	
	100.0	100.0	(%)

最後に Q36 の終末観についてみてみると、前回は「いのちの親（神様）の叱責として近い将来恐ろしいことが起こるかもしれない」と考えている者は 38.1% であったが、今回は 56.3% と 20% 近い顕著な増加をみた。これは、前回の調査以降、オウム真理教によるサリン事件をはじめ、少年による猟奇的殺人事件、そして阪神淡路大震災もあったうえに、このアンケートを送付して

から一週間後にアメリカでのテロ事件が起こったことなども大きく影響しているだろうと思われる。いずれにしても、この結果からは会員らが今の社会のあり方に対してなんらかの疑問を感じていることがうかがわれる。

⑥ 社会意識〔Q42 (教育問題)・Q43 (女性の社会進出)・Q44 (労働運動)・Q45 (支持政党)・Q46 (10年前の支持政党)・Q47 (君が代)・Q48 (靖国神社)・Q49 (改憲問題)・Q50 (中国との戦争)・Q51 (日本の戦争参加)・Q52 (アレフ観)・Q53 (「新しい教科書をつくる会」観)〕

前回調査で確認したように、捧誠会会員はトピックにより保守的にも革新的にもなり、意識が変化に富むということに変わりはないものの、やや保守性が増してきている。たとえば、女性の社会進出に関しては前回よりも理解度が高まり、「君が代」に関しても「君」は天皇のことだと解釈する者は12%減少して13.5%となり、反対に「君」は国民みんなのことだと解釈する者が8%も増え40.0%となったように、革新性も確かに一部では増している。だが、その一方で、以前よりさらに保守性を増したトピックもある。天皇制に関する改憲問題に至っては、「象徴天皇制と国民主権をもっとはっきりさせるべきだ」という意見への支持は10%減少し、「天皇を国家元首にするべきだ」と答えた者は前回より9%上昇し25.5%になった。労働運動や靖国神社に関しては前回と同様で保守的態度は明らかである。さらに、「新しい教科書をつくる会」により作成された教科書に対する好意的な理解も半数近くに上っている。日本の戦争参加に関しては、明確に戦争反対を支持する者は前回に比べ10%減少し、その一方で有識者等に意見を聞いてから態度を決めるという者が8%上昇した。教祖は明確に戦争を否定していたわけではないが、決して戦争肯定の立場ではなく、穏やかに戦争に反対する姿勢であった。それを鑑みれば、基本的な姿勢が反戦ではなくなり、人の意見を聞いてから態度を決定するという会員の意識の変化は少し気になるところである。また、新たに支持政党について尋ねたが、ここでも会員の保守的な意識が強く表われた。支持政党がないと答えた者が25.1%いたが、56.4%が自由民主党支持を表明している。おまけに、今回、民主党支持が7.7%であることを考慮すれば、2党合わせた支持率は10年前の自由民主党への支持率と変わりはない。ところで、オウム真理教に対しての「あれは宗教ではない」という意見には、ほぼ9割の会員が同意している。論者はオウム真理教という「宗教教団」が、あのような事件を起こしたことについてどう思うか尋ねたかったのだが、質問文が直截すぎたらしく、うまく会員の意識をくみ上げることはできなかった。

⑦ 生活観と信仰の関わり〔Q54 (信仰の強さ)・Q55 (信念の強さ)・Q56 (一般的な上下関係について)・Q57 (捧誠会における上下関係について)・Q58 (奉仕活動)・Q59 (生活満足度)・Q60 (生活目標)・Q61 (生きがい)・Q62 (善悪の基準)・Q63 (大切な集団)・Q64 (職場や学校生活への信仰の影響)・Q65 (家庭生活への信仰の影響)・Q66 (親戚、同僚、近隣とのつきあい方)〕

奉仕活動に関してみてみよう。実際になにがしかの奉仕活動に参加している会員は、前回の18.7%から30.1%に増えているが、捧誠会が会として奉仕活動をすべきかどうかという問いでは、「すべきだ」という意見が前回より約10%減少し34.5%にとどまっている。そして、「した方がよいが、まず信仰の充実に努めるべきだ」という意見が7%増え52.9%となった。新宗教教団のなかには様々な社会福祉活動を信仰活動の柱にして取り組んでいるところが少なくない。阪神大震災後の復興活動でも宗教教団による奉仕活動がさかんになされていた。震災地域にも捧誠

会の支部はある。捧誠会では奉仕活動と信仰生活は両立しないと考えられているのだろうか。外部に呼びかけた会員獲得を考え始めた者は増えてきたようだが、依然として会員の内向き志向には根強いものがあるようだ。この志向は会員が抱く生活目標 (Q60) にも表われており、「身近な人たちと、なごやかな毎を送る」を目標として掲げた者は 51.4% に上る。だが、一方で「みんなと力を合わせて、世の中をよくする」を挙げた者も 20.0% あり、社会的志向性も依然として存在していることも確かである。この結果を NHK 調査の結果と較べてみると、なごやか志向の者は 10% も捧誠会の方が多いものの、快楽志向や計画志向は NHK の半分の数値でしかない。そして、社会志向は NHK の 3 倍以上の者が目指している。2001 年の日本価値観調査 (JVS) 結果⁽⁸⁾と比較してもほぼ同様の結果が出ており、捧誠会会員のなごやか志向と社会志向、NHK の結果分析でいうところの、自己本位でなく社会本位、幸福でなく善の追求という志向が顕著であることがわかる (表 8)。

表 8 生活目標の比較

	捧誠会 (2001)	NHK (1998)	JVS (2001)	
1. その日その日を自由に楽しく過ごす	11.4	25.5	22.6	
2. しっかりと計画をたてて、豊かな生活を築く	15.1	25.9	31.9	
3. 身近な人たちとなごやかな毎を送る	53.0	42.0	37.2	
4. みんなと力を合わせて、世の中をよくする	<u>20.6</u>	<u>6.6</u>	<u>8.3</u>	
	100.0	100.0	100.0	(%)

前回の調査と大きな差が生じているのは、捧誠会と同等かそれ以上に大切な集団の有無を尋ねた Q63 であろう。捧誠会以外大切な集団は「ない」と答えた者は、14% 減少し、42.6% となった。その際、会以外の大切な集団として挙げられた集団は、親戚や職場や学校、近隣、趣味のサークル、市民運動など多岐にわたっている。前回の調査ではそれらの集団を選択した者は複数回答であるにもかかわらず、軒並み 10% 台だったが、今回はすべての選択肢の結果が前回の倍以上となり、なかでも親戚や近隣を選んだ者は激増し前回の約 4 倍となっている。この結果から、捧誠会の存在自体の会員生活に占める割合が縮小している様子が見えてくる。そうすると必然的に信仰が会員の生活の場で及ぼす影響力も低下しているだろうと推測されるのだが、Q64、65 の結果は前回と比べてさほど変化していない。職場や学校の場合で会の信仰の影響を問うと (Q64)、52.2% の者が影響していると答えている。仕事をしていない、または学校に行っていないという者が 26.4% いることを鑑みれば、回答該当者は 73.6% となり、そのうちの 7 割は影響を受けていると感じていることになる。そして、家庭における信仰の影響を感じる者は 8 割にも上っており、会が会員の生活の場に及ぼす影響力は依然として大きいものであることが確認できた。つまり、捧誠会が唯一の大切な集団だという会員は半数に満たず、多くの会員は捧誠会と同等以上に大切な集団をいくつか抱えて暮らしているが、会の教えや信仰は会員の生活の様々な場で確かに影響を及ぼしているのだ。最後に、新たな項目として、善悪の基準について尋ねた (Q62)。日

本には規範となる明確な基準が存在しないといわれる。捧誠会の会員と一般の日本人とでは意識の結果に大きな相違があるだろうか。捧誠会会員では、状況によって善悪の基準は全く違うという意見に同意する者が 59.7%，いかなる状況でもあてはまる基準があるという意見に同意する者が 33.2%であった。比較の対象として 2001 年日本価値観調査の結果を挙げると、善悪の基準は「状況による」と答えた者が 67.3%，「絶対的である」と答えた者が 26.8%であった。この二つの結果からは、一般の日本人よりも捧誠会の会員の方が善悪には絶対的な基準があると考えている者の割合が高いことがわかる（表 9）。会では、「天地自然の法則」という用語があるが、これは「絶対のことわり（理）」のことだとされ、これに沿って心、言葉、肉体、物を動かしていくことが重要だと説かれている。一般の日本人に比べて、捧誠会の会員に善悪の絶対的基準を感じさせているのは、このような教えの存在であろう。

表 9 善悪の基準の比較

A：何が善で何が悪かについては、状況によって全く違っている

B：何が善で何が悪かについては、いかなる状況においてもつねに当てはまる基準がある

	捧誠会 (2001)	JVS (2001)	
どちらかといえば A に近い	64.3	71.5	
どちらかといえば B に近い	<u>35.7</u>	<u>28.5</u>	
	100.0	100.0	(%)

4. おわりに

以上、前回の調査結果とも比較しながら 2001 年質問紙調査結果を概観してきた。もう一度、前回からの変化を中心にまとめてみよう。典型的な会員像である「学歴の高い、高齢の家庭婦人」というイメージはますます強化され、高齢にもかかわらず信仰活動はわりあい熱心に行なわれている。だが、前回よりもさらに進んだ高齢化の影響もあり、教団諸行事への出席にしる、日常の自己修養的な行動にしる、全体的に活動は鈍化傾向にある。

そして、最大の変化は、会がおよぼす会員への影響力にかげりが出てきたことである。

それは次の 2 点から捉えられる。まず 1 点目は、教祖の存在および教祖が持っていた不思議な力がおよぼす影響力の低下である。死後 20 年近く経てもなお、教祖は会員にとって依然として偉大な存在であるものの、今では教祖よりも彼の残した教えの方が、会員にとっては身近なものになりつつある。このことは、入信動機や教祖のイメージ、会において癒される理由などの質問項目の結果により確認された。会員から霊能者として認識されていた教祖は亡くなり、その霊能が直接示されることがなくなった現在、会員は遺された教えを彼の特異な力の証しとして受け入れているのである。そして、会員の頼る主な先が教祖から教えに移されたことにより、会員が抱く教団のイメージにも影響がおよぼされた。今回の調査では、教祖が持っていた不思議な力に代表される呪術的な要素を認める宗教団体的なイメージを会に対して抱く会員は影をひそめ、より合理的で修養的な要素を認める修養団体的なイメージが多くの会員に支持されていた。さらに、修養的なイメージを抱く会員も、捧誠会にあまりこだわらない者と、宗教としての捧誠会に優越性を感じている者にと二分されることを確認した。日常生活における修養実践を重視するこの教団

はもともと修養団体的な雰囲気ではあったが、それを宗教団体たらしめていたのが教祖の存在であった。とくに、教祖の持つ力に拠るところが大きかったが、教祖の死後は会員が教祖の力を感じる機会が減少する。そんななかで、前回の調査時には「ご手印お守り」という教祖の持つ不思議な力を感じさせる具体的な装置が存在していた。そして、この「お守り」によるお手当て（癒し）、つまり救済儀礼まで一旦は作りあげたかにみえたが、会員の支持を得られず、救済儀礼としての定着を図ることはできなかった。さらに今回の調査時には、この「お守り」は特定の個人に与えられるものではなく、単に役職に付随するものというオープンな性格が新たに付与されている。その結果、「ご手印お守り」は文字通り会員にとって単なるお守りと化してしまっていた。したがって、教祖の持っていた力を容易に感ずることはますます困難になり、会員に対して、教祖の存在や教祖が持っていた不思議な力はその影響力を縮小せざるを得なかったのである。

そして2点目は、会の存在自体が会員におよぼす影響力の低下である。捧誠会は、前回の調査時には会員にとって、唯一の、あるいはごく少数の大切な集団のうちのひとつとして考えられていた。しかしながら、今回の調査では、捧誠会を複数ある大切な集団のうちのひとつとして認識している会員が増加していた。つまり、これらの会員の生活には捧誠会と同等か、ともすれば捧誠会以上に大切な集団がいくつも存在することになり、もはや生活のなかで最も重要な位置を占めるものとして信仰が捉えられていないことを示している。会の教えや己の信仰が自分の生活の様々な面において影響をおよぼしていると多くの会員は認識しているが、その認識の強さも前回よりいくぶん低下している。どうやら、会の教えは会員の生活になじみ溶けこんでいるのだが、その分、特別に意識されなくなっており、信仰に裏づけされたものというよりは、日常化した修養実践の指針として存在するようになってしまっているのである。

本稿では、新宗教教団である修養団捧誠会に対して実施した2001年質問紙調査の結果を、前回の調査結果等と適宜比較しながら分析を行ない、その特徴を教団における宗教性の希薄化としてとらえた。今後はさらに、1989年調査と2001年調査、ともに対象となった者の回答を比較検討し、教団史との関連のなかで、個人の意識変容という、よりミクロな視点から分析を重ねていきたい。またその際には、地域による会員の意識の相違を押さえておくことや、会員への個人的なインタビューなども行なって、よりトータルな教団分析に努めることが肝要だと思われる。

註

- (1) 修養団捧誠会の詳しい歴史や教祖出居清太郎の履歴については、島菌進『時代のなかの新宗教—出居清太郎の世界 1899-1945』弘文堂、1999年を参照。
- (2) 大学院生として調査に参加。この時の共同研究の成果は、島菌進編『救いと徳 新宗教信仰者の生活と思想』弘文堂、1992年にまとめられている。
- (3) なお、教団の組織的変化等に関して、教団の教学院、松本宏一氏にいろいろとご教示いただいた。
- (4) 当初、この「お守り」の授与には、自らの死後は身内に「お守り」を相続させていく使命を伴っていた。そして、それが不可能な場合に限り、会に「お守り」を返却することになっていた。だが、授与規定の変更に伴い、役職者への貸与となり、役職を終えたら「お守り」は会へ返却となる。だが、授与規定変更前の「お守り」に関しては、多様なケースがあり、制度的な整備にはまだ時間がかかるという。
- (5) したがって、質問項目に関する最終的な責任は島菌教授と永井にある。

- (6) 修養団捧誠会 1989 年調査のデータについては、永井美紀子・芳賀学・山田真茂留「会員の意識と行動－質問紙調査に見る－」島菌進編前掲書，253－290 頁を参照。以下，捧誠会 1989 年調査結果との比較の際は同論文を参照。
- (7) NHK 放送文化研究所編『現代日本人の意識構造 [第五版]』日本放送出版協会，2000 年。以下，NHK 調査結果との比較の際は同書を参照。
- (8) 南山大学のロバート・キサラ氏を中心とするグループによる調査。詳しい調査結果はまだ未発表である。調査結果の概要については、永井美紀子「日本価値観調査概要報告」『国際宗教研究所ニューズレター』第 33 号 (01-4)，2002 年，3-7 頁を参照。以下，2001 年日本価値観調査結果との比較の際は同論文を参照。